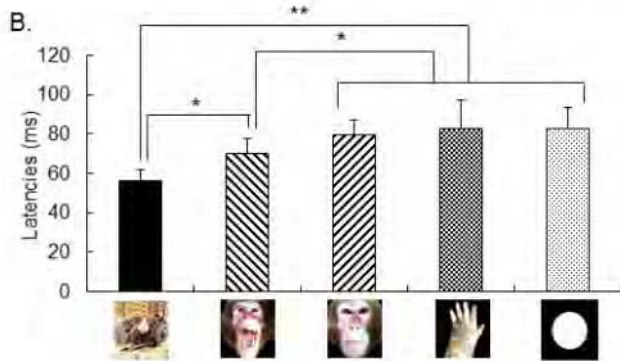
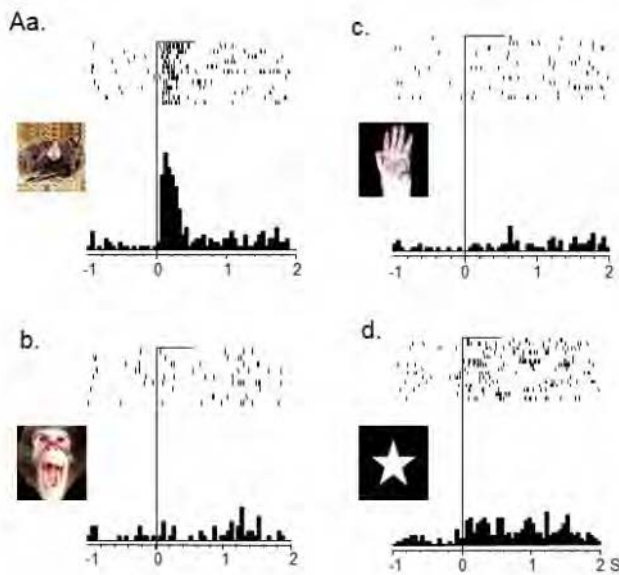


# 霊長類における 顔とヘビの本能的認知機構

西条 寿夫(富山大学)



最近の人類学的研究によると、ヘビは人類を含む霊長類共通の天敵であり、人類の脳は、ヘビを検出する視覚能力を高めるために進化してきたことが示唆されている(ヘビ検出仮説)。一方、ヒトの新生児やニワトリの雛が学習無しに初めて見た顔様刺激を認知できることから、遺伝的に符号化されている顔の本能的認知機構が脊椎動物に共通に存在し、脊椎動物に共通に存在する視覚経路である膝状体外視覚系(上丘、視床枕)がこの顔認知に関与している可能性が示唆されている。本講演では、上丘の破壊実験ならびに視覚刺激に対するニューロンの応答性から、膝状体外視覚系が顔やヘビの本能的認知機構に関与していることについて考察したい。

## 図の説明

サル視床枕ニューロンのヘビ、サルの顔、手、および単純図形に対する応答性。(A)視床枕ニューロンの一例。ヘビ画像に強い応答を示している。(B)上記ニューロンの平均応答潜時。ヘビに対する潜時が最も短い。



富山大学医学薬学研究部(医学)システム情動科学教授。医学博士。  
1986年富山医科薬科大学大学院修了。1986年富山医科薬科大学医学部助手、1993年富山医科薬科大学医学部助教授を経て、1998年より現職。  
著書に「社会活動と扁桃体機能. 社会活動と脳—行動の原点を探る」(医学書院, p13-33, 2008)などがある。